

— 書 評 —

田中實著『ロレンスの愛と性』(鳳書房)を推奨する

熊澤佐夫

筆者は、長年ロレンスの研究に没頭してきたが、その研究の集大成が本書である。「ロレンスは、真の人間と人間の繋がりがどのようなものであるかを生涯問い続けた作家である。とくに男性と女性の結びつきが、ロレンスの追求してやまないテーマであった」と筆者が述べているように、様々なタイプの人物を造型し、その人物を通し、ロレンスが追求した愛の多様性を、第1章『息子と恋人』から第8章『チャタレイ夫人の恋人』にいたるまで克明に検証し、ロレンス研究に新たな視点を加えた、意欲的な試みが本書ではなされている。

重要なテーマや背景となる事実などが入念に描写され、用いられる文体が平明で、ロレンスの愛と性の追求の軌跡を理解するのに最適である。カバーに描かれている絵は、詩人で画家でもある筆者が、「肉体の結合に魂の結合が融合する愛。悦びを分かち合い、寂しさの癒し合いである愛」の讃歌を表現したものであろう。

(英語学科 教授)